

吉田論考へのコメント

北川 泰三

吉田正樹さんの自治体職員時代の奮闘ぶりとその後の人生に向き合った姿が感じられる論考で、誠にありがとうございました。また先日は、Zoom 懇談会で、執筆を通して、地域における長年の変化を語っていただきました。

近江八幡市の行政経験の中で、最も大きなテーマだったのは、「八幡堀整備事業」ということでした。高度経済成長やモータリゼーションの中で、日本の各地が近代化されていき、貴重な地域資源が消されていく時代でもありました。八幡堀もともすれば、埋め立てて、自動車交通を優先する可能性もありました。この時期に、民間から青年会議所メンバーの川端五兵衛氏の呼びかけで、八幡堀の保存運動が広がり、大きなビジョンの中で、価値創造や地域の誇りとする動きとなったわけです。吉田さんもこうした運動とともに職員として活躍されたと思います。保存活動が動き始めれば、そこから景観を大切にす運動につながり、それは、市民協働で守り維持していく活動にも展開していきます。川端氏はその後市長となり、地域の資源を観光にも生かされていったのだと思います。

こうしたまちづくり運動をしてきた時期は、損得勘定なし、金儲けを考えての運動ではなかったし、官も民も関係なく、みんなで取り組んできたわけです。その結果、多くの経験の中から、吉田さんの名言と思える表現が随所に見受けられました。

振り返ると、今は「地域のために何かやろうという人がいない」「大局的な見方が少ない」「自然の動きを意識したまちづくりがない」という指摘には共感できます。国のやり方も地域のそれもそうした指摘がぴったり当てはまるからです。

役所を退職後は、「街場の産品は添加物だらけで気になった。だから、無農薬の物づくりをみんなでおこなうのが、地域のあるべき姿だ」として、無農薬での農業に取り組んでおられます。

八幡堀の保存は、地域の誇りを守ることにあつたわけですが、観光事業にすっかり変わってしまった。人口 8 万人に対して、観光客は 400 万人。こうなると、人々は観光で金儲けをする意識に変貌してしまった。客が多すぎて、商売しか考えない。愛される町にしたかったのに。地域の理念や誇りを大事にする人がいなくなった。

吉田さんは、原点を見据えて、人口も減っていく今こそ、内発的な発展を考えていかないといけないのだと、このままでは地域が滅びると危機感をあらわにされています。よろずや（個店）に行かずスーパーへの流れが止まらないなら、次世代が残る方策を考えねばならない、と。

観光で沸き立つほど、逆に、地域文化の再点検を考えねばならない、行き過ぎた開発に八幡堀がなつてしまった。本来、観光のまちではなかったのが、観光都市になってしまった。このままでは、地域の魅力が何であるか分からなくなるし、地域を大事にすることにも繋がらない。

ほどほどに儲かる地域でないと、皆が生き残れない。収入だけでは、子どもは残れない。

1971 年、名古屋で立ち上げた地域問題研究所の清水静造さんは、「身銭を切ってやる」ことをモットーにして、地域の連帯づくりを広げてきた方で、彼から多くを学んだと。八幡堀運動は、行政職員ではできなかった、清水さんのように身銭を切ってやること、部下をじゃましない上司になること、現場では自分の言葉で話せること、誇りさえあれば地域に子どもは残る、という言葉は、核心を突いていたと思う。これは精神論ではなく、自律した地域をつくりあげていく（開発していく）ルールであるように思う。

少子化も行政施策としてではなく、地域の誇りをつくっていいことから、子どもを残していこうという気持ちになると改めて感じた。

失われた 30 年と言われて久しいが、90 年代以降、新自由主義や金儲け主義が、結局は地域を疲弊させ、さらに公から民へでそれを加速させてきた。地域の誇りを蔑ろにしてきたということを暗に示しているのではなかろうか。国土計画でも、2018 年「稼げる国土専門委員会」立ち上がった時は、びっくりしたが、まさしく吉田さんの憂える状態に陥っていたと思わざるを得ない。事態は深刻なのです。

新・地域開発は、そうした深刻な状況であることを喚起しつつ、対処、展望を探っていきたい。